

新たな生徒指導の実践・研究

高校生  
心のサポートシステム

① 関係機関との連携

現状と方向性	1
事例1 摂食障害・リストカットの生徒への支援会議	2
事例2 定期的に開催した支援チームでの事例研究～支援チーム立ち上げの経緯～	3
事例3 薬物乱用生徒への支援会議	5
事例4 行動を制御することが難しい生徒への支援会議	7
「総合的な生徒指導の在り方を目指して」 茨城キリスト教大学教授 安藤 博 氏	9

② 反社会的行動

現状と方向性	10
事例1 中傷メール・恐喝	11
事例2 暴力行為	13
事例3 万引き・窃盗	15
事例4 無断免許取得・単車乗車	17
事例5 喫煙	19
「やれば減る・禁煙教育 高校生の喫煙をなくすために」 和歌山県立和歌山東高校前校長 笠原悌二郎 氏	20
事例6 性非行	21
「少年非行の現在と未来 -司法の立場から-」 東京家庭裁判所主任調査官 藤川 洋子 氏	23

③ 非社会的行動

現状と方向性	24
事例1 自殺未遂	25
事例2 自傷行為	26

事例3 集団暴行による不登校	27
事例4 脅迫メールによる不登校	28
事例5 不安症的な傾向	29
事例6 保健室登校	30
事例7 他人との接触を極端に嫌がる傾向	31
「高校生の社会規範意識とその育成」 関西学院大学教授 横山 利弘 氏	32

#### ④ その他（問題行動前の予防等）

現状と方向性	33
事例1 全職員による生徒面談週間の実施	34
事例2 入学式直後のグループワーク	35
事例3 コミュニケーション授業	37

#### ⑤ ホームルーム活動

現状と方向性	39
事例1 ボディランゲージコミュニケーション	39
事例2 集団形成時におけるアイスブレイキング	41
事例3 命の尊さを見つめる授業	43
事例4 ストレスマネジメント	45
事例5 ヒューマンビーイング	47

資料 関係機関一覧	48
-----------	----

編集後記	49
------	----

### 3

## 命の尊さを見つめる授業

### ねらい

- 少年犯罪について考え、社会に目を向けさせる。
- 命の重さを見つめさせる。
- 自分の命も大切だということ、自分が生きていることも大切だということに気づかせる。
- 学校のイメージアップによって生徒の自尊心を高める。

### 時期 通年

場所 国語科授業、またはホームルームにおいて

対象者 全クラス



### 内容

#### ■準備物

- 少年犯罪被害当事者手記集「話を、聞いてください」  
(少年犯罪被害当事者の会/2002年4月サンマーク出版)
- 定時制高校生徒が殺された事件の新聞記事(神戸新聞/2002年6月19・20日)
- ビデオ「私の家族が殺された・・・その時 夫は 母は・・・」  
(讀賣スーパーテレビ2002年7月1日放送)
- 少年犯罪被害当事者の会 A子さんから届いたメール

#### (1) 「話を、聞いてください」(第1次～第6次)

話を聞きながらあらすじプリントの空欄を埋めていく。

#### (2) 新聞への投稿(第7次～第9次)

定時制高校生徒が同級生らに殺された事件の新聞記事を読み、感じたこと、「話を、聞いてください」を読んだ感想、少年犯罪についての自分の考え等を文章にし、新聞に投稿する。

#### (3) ビデオ「私の家族が殺された・・・その時 夫は 母は・・・」(第10次～第11次)

少年犯罪で家族を奪われた人々に取材したドキュメンタリー番組を見る。

#### (4) ホームページ閲覧(第12時)

少年犯罪被害当事者の会等のホームページを見る。

## 結果と考察

ただ感想文を書くだけでなく、新聞へ投稿することによって、生徒の自尊心を高め、自分たちも社会に参加しているのだという自信を持たせる。さらに、これらの活動が学校全体のイメージアップにもつながる。

## 生徒の作文事例

僕はこの文章を読んで、昔のことを思い出した。あのころは、楽しかったらいいと思いながら過ごしていた。だから僕らは加害者の方が多かったと思う。こんな被害者の気持ちなんか考えたこともなかった。じゃまなものをつぶすことだけ考えていた。こんな文章を読むと、とんでもないことをしていたと思う。今、僕は、この文章の気持ちがわかるだけ成長してよかったと心から思う。

少年犯罪の話を書くたびに、かつて身近で起こった事件を思い出します。被害者は私の1つ年下の男の子で、親しくしていた私たちは、彼の死を悲しみました。皆加害者を恨みました。現在もその悲しみは消えません。加害者は今、刑務所の中で何を思って生きているのだろうと考えます。

人を殺せる気持ちが分かりません。そんな人は、被害者の身内や両親、兄弟や友達のことを考えたことがあるのでしょうか。加害者は皆「反省している」とか言うけれど、本当なのかと思ったりもします。誰がどんなに悔やんでも、死んだ人は帰ってこないのです。

結果、一人の生徒の文章が、新聞読者欄「発言」に掲載された。少年犯罪について書いたのが、定時制高校の生徒だったからこそ、載せてもらったのかもしれない。書いた本人はもちろんとても喜んでいたら、他の生徒にも、イメージアップキャンペーン大成功だ」と大喜びして報告した。

### 遺族の気持ち 分かってきた

定時制高校の二年生です。学校の国語の授業で、少年犯罪被害当事者手記「話を、聞いて下さい」を読みました。この授業を受けるまでは、「被害者の家族は、かわいそうだなあ」くらいにしか思っていませんでした。授業を通して、家族の思いや悲しみが、深く分かるようになりました。警察が加害者の少年の意見しか聞かないことを知って、ビックリしました。加害者やその家族は、被害者の家族の気持ちを考えたことがないと、私は思います。「悪いことをしてしまった」と思っても、被害者の気持ちにならなかって考えたことがないように思えたからです。六月には、埼玉で、定時制高校生の生徒が、同級生らに殺される事件が起きてしまいました。これからは、この本を、一人でも多くの人が読んで、こういう事件がなくなるように、と願っています。